

高等学校での学校臨床心理士による教師と学校への コンサルテーションに関する臨床心理学的研究

中村(金子), 美穂

<http://hdl.handle.net/2324/1959064>

出版情報：九州大学, 2018, 博士（心理学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）



氏 名 : 中村 (金子) 美穂

論文題名 : 高等学校での学校臨床心理士による教師と学校へのコンサルテーションに関する臨床心理学的研究

区 分 : 甲

博 士 論 文 の 要 約

本論は、高等学校（以下、高校）における生徒のさまざまな水準の問題状況に応じて、学校臨床心理士が教師個人及び教師集団、学校組織に対して行うコンサルテーションについての臨床心理学的研究である。その問題意識と目的は、[序章] 及び [第 1 章] より、次のようにまとめられる。

近年の高校における学校臨床的問題は複雑化かつ深刻化し、生徒のさまざまな水準の問題状況に対する理解と援助が急務とされる。実際に高校の学校現場では学校臨床心理士による「チームとしての学校」への組織的な支援活動が期待されている（瀬戸，2000）。そのような教師と学校への援助方略として、教師へのコンサルテーションがある。高校のように学校訪問の回数や時間が限られたスクールカウンセリングを有効に活用する上では、直接生徒と関わる教師全体への集団コンサルテーションが重要な機能を持つのではないかと思われる。すなわち高校における学校臨床心理士は教師個人のみでなく教師集団、さらには学校組織へ働きかけるコンサルテーションの在り方について検討する必要があると考えられる。高校におけるスクールカウンセリングの研究は極めて少なく、その方法についても暗中模索段階である（佐藤，2010）とされる。また、高校の教師は学校臨床心理士に教師へのコンサルテーションを期待している（荒木・中澤，2007）とされることから、本研究を通して、高校における学校臨床心理士が生徒の問題状況に応じて行う教師と学校へのコンサルテーションの在り方を実証的に検討する研究成果に対する教師と学校のニーズも高いと考えられる。

以上より、本研究の目的は、①高校での学校臨床心理士による教師個人及び教師集団、学校組織へのコンサルテーション活動の在り方について明らかにする、②高校教師がコンサルテーションに期待する学校臨床心理士の役割と機能を明らかにして、生徒の「予防援助的問題状況」と「危機管理的問題状況」という視点から、各問題状況による差異について考察する、③教師集団を対象とする研修型のコンサルテーション実践介入事例を通して、学校臨床心理士による教師及び学校への関係調整的かつ成長促進的な支援の持ち方とその効果などについて把握することである。目的①、②、③の達成によって、学校臨床心理士が教師と学校に対して行うコンサルテーションモデルを提案することが本研究の最終目的である。

本研究では、事例研究（第 2・4・7 章）及び調査研究（第 3 章）、実践介入事例研究（第 5・6 章）という方法を用いて実証的に検討する。

まず第 2 章では、目的①、②、③の達成に向けて、高校でのスクールカウンセリングにおいて、筆者が学校臨床心理士として実践した教師と学校へのコンサルテーション活動を振り返り、本研究の仮説を生成した。学校臨床心理士は生徒の予防援助的かつ危機管理的な問題状況に応じて臨機応変に機能し、学校臨床心理士が教師個人のみでなく教師集団（学校組織）へ積極的に働きかけて、学校臨床心理士と教師、教師相互の協働的なコンサルテーションを行うことが有用であると考えられた。この結果から、本研究の仮説は、①高校のように学校訪問の回数や時間の限られたスクールカウンセリングにおいては、学校臨床心理士が生徒のさまざまな水準の問題状況に応じて、教師への個別コンサルテーションと同時進行で教師への集団コンサルテーションを組み合わせ、学校の組織へ積極的に働きかけることが有効である、②高校教師が抱える生徒の問題状況は、予防援助的問

題状況または危機管理的問題状況、時には緊急支援的問題状況と多様であり、教師がコンサルテーションに期待する学校臨床心理士の役割と機能は各問題状況によって異なる、③学校臨床心理士が教師集団（学校組織）に働きかけるコンサルテーション活動としては、教員研修を活用した研修型のコンサルテーションが有効であり、教師が学校現場で実行できる具体的なチーム援助を体験的に学習するような実習演習が有用であることとした。

次に、第3章では、目的②とその仮説をもとに、高校教師を対象とする質問紙調査を実施して高校のスクールカウンセラー活用事業に対する教師の評価などを把握し、教師がコンサルテーションに期待する学校臨床心理士の役割と機能について探索的に検討した。その結果、教師は、生徒の「予防援助的問題状況」において、「教師主体の援助活動のためのコーディネーター役」、「教師の適切な援助活動のためのアドバイザー役」、「教師の内省促進のためのモニター役」、「教師と保護者の関係促進のためのコネクター役」といった役割と機能を期待することが示された。その一方で、「危機管理的問題状況」においては、「チーム援助活動のコーディネーター役」、「教師の緊急支援活動のためのディレクター役」という役割と機能を期待することが示された。この結果から、高校教師がコンサルテーションに期待する学校臨床心理士の役割と機能は、生徒の問題状況によって異なる可能性があることが示唆され、学校臨床心理士はコンサルタントとして教師が抱える生徒の問題状況によって異なる役割と機能を果たす必要があると考えられた。

そして、目的③とその仮説をもとに、第4章では、筆者が高校の学校臨床心理士として、教員研修を活用し実践してきた教師集団を対象とするコンサルテーション活動を報告し、その効果や課題などについて検討した。その上で、第5、6章では、筆者が教師と学校のニーズに応じるかたちで高校の学校現場に介入し、教師集団を対象とする研修型のコンサルテーションを実践して、その在り方や効果について検討した。その結果、教師集団への研修型のコンサルテーションにおいては、学校臨床心理士と教師が協力して教員研修を組み立てること、さらに参加した教師同士が生徒に対するチーム援助を体験的に学習する過程が重要であった。さらにその過程では学校臨床心理士がロールプレイングやロールリバーサルを用いることで、教師が各自の実践を振り返り生徒に対する見方や関わり方を自発的に見直して修正し改善するなど教師自身の変化成長が見られた。つまり、学校臨床心理士は研修型のコンサルテーションを通して、チームとしての教師集団を関係調整的かつ成長促進的に支援し学校組織の問題解決能力を向上させたと考えられた。

さらに第7章では、筆者が教師と学校のニーズに応じるかたちで実践した高校での緊急支援に対するコンサルテーション事例も通して、目的①とその仮説について検討した。学校臨床心理士が緊急支援チームのキーパーソンとなる管理職への個別コンサルテーションを中心に教師全体への集団コンサルテーションを組み合わせ、学校組織をコンサルティとして援助するコンサルテーション活動を行なった結果、学校集団は通常機能をとり戻し、管理職を中心とする緊急支援活動は組織化された。さらに学校臨床心理士は教員研修を依頼され、教師集団への研修型のコンサルテーションが定例化した。つまり、学校臨床心理士が教師への個別コンサルテーションと同時進行で集団コンサルテーションを組み合わせ、教師集団、ひいては学校組織へ積極的に関与することは有効であると考えられた。

総じて、第8章では、前章までの実証的検討をもとに、高校でのスクールカウンセリングを有効に活用する上での学校臨床心理士による教師と学校へのコンサルテーションの在り方と、その過程で期待される学校臨床心理士の役割と機能について総合的に考察し、コンサルタント養成の教育課程の必要性などについても論じた。さらに高校における生徒のさまざまな水準の問題状況に対する対応と解決に向けた「学校臨床心理士と教師及び学校との協働的コンサルテーション」を展望して提示しながら、本研究の限界と課題についても検討した。